

男女共学大学の軍事文化と女学生の「市民権」構成過程 ——音楽学部声楽科を中心に¹⁾——

羅 允慶²⁾

金 友子 (訳)

1. 問題提起

世界 76 ヶ国が徴兵制を実施しているが、大韓民国の徴兵制は唯一「敵と 24 時間対峙」しているだけに、その必要性、実践程度、そして「強い軍」を作り出そうとする意図において他の追随を許さない (Moon, 2005)。(非)合法的に軍に行かなくてもよい男性を、妬み半分、うらやましき半分で「神の息子」というほど、大韓民国の男性にとって軍は避けがたい「通過儀礼」である (羅允慶, 2005b)。

男性が共通して経験したライフサイクルとしての軍隊とそこで内面化した軍事主義に対する議論は、シンシア・エンロー、権仁淑、シム・ヨンヒなど、主にフェミニストたちによってなされてきた。軍事主義と平和 (沈ヨンヒ, 2005; 鄭喜鎮, 2005)、軍事主義と家父長制 (権仁淑, 2005; 辺ファスン, 1995)、軍事主義と男性中心性 (ユ・ヨンスク, 2003; 李ドンフン, 2001)、軍事主義と日常性 (権オープン, 2000) などの研究がなされてきており、これらの研究は女性に対する軍事主義の影響とジェンダー・ポリティクス〔性別政治〕が軍事主義の維持と発展にとって核心的な装置となっていることを共通して指摘している (鄭喜鎮, 2005)。

にもかかわらず大韓民国の軍隊は、組織構成員の男性偏向性がゆえに、これまで女性の経験と視角から照らし出されたことはほとんどない (権オープン, 2000; 羅允慶, 2005a)。近年、女性軍人の数が増加しているという事実と、69 万人の男性軍人のうち約 23% に当たる 15 万 9000 人が配偶者による再生産労働を通じて軍生活を維持してきたということは (権仁淑, 2005a)、軍隊が完全に男性のみからなり、男性によってのみ維持・発展してきた場であるといえない根拠となる。同様に男女共学大学もまた、約 60 年前に初めて女学生を受け入れてから女学生の数は継続的に増加し、現在、女学生は全学生数の約 30 ~ 40% に達しており、構成員の男性偏向性を変化させているのである。したがって、大学と大学教育を経験する女性たちの視角と解釈が、大学に対する理解に反映されねばならない。

男女共学大学の女学生数の増加によって、各大学は女学生に親和的な多様なプログラムを企画してはいるが (金賢美ほか, 2006)、それらのプログラムは男女共学大学が軍事主義的であり、したがって性差別的であり位階的かつ暴力的であるということを念頭に置いていない。また、男女共学大学と軍事主義をつなぐフェミニストの言説もまた「常識的」なレベル、すなわち「男性中心性、暴力、軍事文化」は密接なつながりを持つという言及程度にとどまっており、男女共学大学の男子学生が日常的価値として内面化した軍事主義が具体的にどのように再現され、それが女学生にどのような影響を及ぼしており、また社会全体とはどのような有機的関係を持

つのかは論じられてこなかった。おそらく、韓国の男女共学大学の男性中心性と軍事主義に対する問題提起は、最近の少数の研究（たとえば権オープン, 2000; 権仁淑, 2005a, 2005b; 金ウンジン, 2002; 羅允慶, 2005a, 2005b; 朴露子, 2001）によってなされてきただけであるといえる。

権オープン（2000）の研究は、修士学位論文としてなされたもので、大学卒業者のうち軍を経験した男性と大学時代に復学生³⁾と交流したことがある女性を対象にしている。復学した男性が学内で実践する性差別性を明らかにしたものである。権仁淑（2005a）は、80年代当時に学生運動圏の中で民主と民族という名のもとに性的平等がいかにして故意に無視されていたのかを語っており、このような男性中心性の問題は軍事主義の残滓に起因するものであると指摘している。金ウンジン（2002）は、女子大学から男女共学化した大学において、女学生たちが学生会などの組織の中でどのように周辺化されてきたのかを明らかにしている。それによれば、女学生リーダーたちは年齢を重視する大学文化の中で復学した男子学生よりも生物学的年齢が低く、軍隊でリーダーシップを経験していないという「客観的」理由によって、男女共学化された大学では学生のリーダーになれない。羅允慶（2005b）は、男女共学大学に在学している復学生と在学学生男女に対するインタビューを実施し、軍から除隊した後の男性たちが軍を経験していない在学学生と階格的で暴力的かつ性差別的な関係を作っていることを明らかにした。その結果から、羅允慶は大学内の復学生たちのための「再活」プログラム（unlearning）の実施を提案している。

本研究は、男女共学大学の軍隊文化と男性中心性を批判する上記の諸研究とその脈をともしつつ、復学生の軍事主義的实践を詳細かつ具体的に明らかにし、それが大学の中の女学生の「メンバーシップ（市民権）」を構成する際にいかなる影響を及ぼしているのか、また社会全体とはどのような有機的関係にあるのかを分析していく。

研究対象空間として男女共学大学音楽学部の声楽科を選択したが、その理由は、研究者が偶然に知り合った声楽専攻の男子学生2名から、声楽科のいわゆる「軍気」⁴⁾が軍隊にも劣らないものであることを知ったことによる。これは「芸術魂」、「情熱」、「感受性」といった抽象的単語によってイメージされてきた音楽学部を思えば、意外なことである。彼らの情報によれば、ソウルにある某大学の声楽科は、約10年前にテレビでドキュメンタリー番組に取り上げられて、学生間のヒエラルキーと暴力性を告発されたほど軍隊的だ。本研究のインタビュー対象者⑦が述べたように、（声楽科よりも）「軍隊の方が楽なほど」声楽科は軍隊的雰囲気満ちている。このような文脈から本研究は、復学生が在学している男女共学大学の声楽科を選択し、そこで実践されている軍隊文化の多様で具体的な面を明らかにし、その中で女学生のメンバーシップ〔市民権〕がどのように構成されるのか分析していく。そうすることで、声楽科の教授はもちろん、大学の意思決定権者を、男女共学大学が性的平等を実現し、民主的に再構成されるための課題に向き合わせていきたい。

2. 研究参加者情報および研究方法

一般に、ある組織において一方の性が構成員の約30%を占める時、その人々はもはや少数者ではなく「決定的大衆（critical mass）」の意味をもつ。これらが少数者の位置から脱して多数派

の性と同等に意思決定過程に参加することによって組織を平等に構成するとみなせるからである。しかし、男女共学大学の声楽科は、入学生の性別比が1:1となる形式的なジェンダー平等性を維持している空間だが、内容的には女性が絶対少数の空間と類似した男性中心性と軍事文化⁵⁾を主要な特徴としている。

本研究に参加したインタビュー対象者は全部で10人であり、ソウルに所在する7つの男女共学大学声楽科在学中の5人の女学生（このうち1人は大学院生）と、除隊後復学した4人の男子学生および1人の男子卒業生である。主に筆者が属する大学の学生や知人を通じてインタビュー対象者を紹介してもらった。他の時とは異なり、本研究のインタビュー対象者は事例⑥を除き、インタビュー参加の事実が外部に漏れることを心配していたが、それはインタビュー内容が自分の所属する団体の「恥部を暴露」する性格を帯びていたからである。彼・彼女らは録音機でインタビュー内容を録音することに反対し、インタビューを記録する研究助教の存在に対しても居心地の悪さを見せた。インタビュー⁶⁾は1時間半～2時間ほどで、彼・彼女らと再インタビューはしなかった。彼らと一度会うことだけでも様々な、そして一貫した情報を得ることができたからだが、彼らのうち誰も2度目のインタビューに応じようとしなかったからである。インタビューは2人を除いてすべて筆者の研究室で実施した。この2人のうち1人とのインタビューは、彼が現在指揮者として働いているある団体の事務室で（事例⑥）、もう1人とのインタビューは彼の家（事例⑨）でなされた。

彼・彼女らは「音楽学部声楽科の全体的な雰囲気や学生たちとの関係について説明してほしい」という最初の質問に対して組織防衛的態度で一貫し、声楽科の長所、例えば先輩・後輩間の「情の厚さ」などを中心に話そうとした。インタビューが終わった後にインタビュー結果が学問的にのみ活用されるということ、および筆者と研究助教以外は誰もインタビュー内容にアクセスすることはできないことを幾度も確認せねばならないほどに、インタビュー対象者は声楽科内部の「極秘」を漏らしたことを重荷に感じていた。（インタビュー対象者10人の情報は次の表を参照のこと）

事例	性別	年齢および学年 / 在学（出身）大学	備考
1	女	27歳3年 /G 大学	
2	女	21歳2年 /D 大学	
3	女	25歳 M1/H 大学（大学院）	B 大学卒業
4	女	23歳2年 /A 大学	J 女子大学声楽科在籍経験
5	女	23歳2年 /G 大学	K 女子大学声楽科在籍経験
6	男	29歳（卒業後2年） /A 大学	A 大学卒業後指揮者
7	男	28歳4年 /B 大学	
8	男	29歳4年 /G 大学	
9	男	26歳3年 /C 大学	
10	男	27歳3年 /E 大学	

3. インタビュー分析結果

声楽科学生たちにとって「軍気」は日常的用語であり、科の雰囲気画一化の度合いが少々足りない時のことを「軍気が抜けた」と言うほど、声楽科で軍事文化は支配的である。性別によって「軍気」に対する感受性は異なり、大学ごとにその程度の違いがあるだけで、それぞれ別の学校に所属しているインタビュー対象者の話す内容には、かなりの統一性を持った軍事文化がある。その理由は、音楽学部でリーダー役となっている復学生たちが、一時期「同じ空間」つまり軍隊を経験したからだ。

インタビュー結果は1)「自然な」男性中心的性別ヒエラルキー（垂直／水平的関係の双方で）、2) 声楽科内の軍事文化の類型、3) 声楽科内の軍事文化の維持機制、4) 学習権侵害要素としての軍事文化の4つに範疇化され、それぞれの範疇は下位範疇を持つこともある。

3. 1 「自然な」男性中心的性別ヒエラルキー：垂直／水平的関係の双方で

洪ソソビ（1999）は女性客室乗務員に関する研究で、航空会社が男性乗務員には4年制大卒者を、女性乗務員には2年制大卒者を選抜することにより、男性には「重要な」安全業務と人事管理を、女性には「周辺的な」サービス業務と乗客の対応を割りあてることによって、その性別の配置を「自然に」作ると指摘する。このような構造は同期入社でも2～3年が過ぎた時点で、男性が同期あるいは先輩女性を管理するようになる男性中心性と性差別性を受容させる。同じやり方で声楽科における復学生たちは2～3年間の軍隊経験によって、軍に行く必要のない女学生たちの上に「自然に」君臨し、そうして男性中心性と性差別性は構造化される。声楽科におけるこのような面は、女学生が大学の総学生会長あるいは学科の代表になったりする最近の現象とはかなり異なる面である。

実質的に学生会長は男子学生がして、科の代表も男たちだし、女は科の副代表です。副代表は)ただ学生会長や科の代表が命じる仕事を女学生たちに伝えるだけの役です。それでも、あんなふうに命をかけて科の副代表の女性たちは他の女学生たちに「女復学生」のようにふるまうんです。(事例4)

私が学校に通っている間に女学生が科の代表になったことはありません。多分、今後もずっとそうでしょう？ 男の復学生より年下で……どうやって軍気を正せますか？ させてもできません。(事例9)

科の副代表役を遂行する女性たちのうち何人かは、復学した高学年男性を真似て彼らと付き合い「例外女性になる」戦略をとる（金ウンジン、2002）。その理由は、声楽科の学生がもちうる権力と資源（教授との仲の良さ、教授に認めてもらうこと、後輩の統制など）が、復学した男子学生に集中しているからだ。彼女たちはその男性たちの「副」役割を忠実に行うことで男性たちの資源を共有するようになり、男同士の絆〔男性連帯〕に入り込めると考えている。しかし男子学生たちの考えは違う。

女学生たちは留学への恐れ、成功に対する不安、自分に対する確信もなく、弟子として先生のバトンを受けとるのは男子学生たちです。女学生たちは良い作品を作るために手伝ってくれる部分はあっても、前には出ません。女はまずは結婚しなくちゃならないから。（事例7）

李ウナ（1999）によれば、組織での女性に対する否定的認識——たとえば女性は結婚とともに組織を去るはずだ、女性は責任感がない、女が上司だと先行き不安、など——は、個人的経験を通じて構成されたものではなく、男性職員たちの間でやりとりされる絶え間ないゴシップの結果だという。声楽科においては、男子学生たちとは違って女学生たちには「弟子」、「仲間」、「後輩」としてのアイデンティティを持つことができる文脈が与えられない。この三つの範疇は男子学生だけのものであり、このような現象は他の単科大学や科よりもはるかに歴然としている。組織と同じく声楽科構成員たちには、女学生は早く結婚して専攻分野を離れる人々、と認識されている。こうして、女学生たちが「真摯な」専攻者になることができない文脈の問題を無化するのである。

在学生より多くは5歳、少なくとも1～2歳ほどしか年上でない復学生たちは、影響力においては在学生たちを威圧する。彼らは声楽科内部の秩序を作って維持する「治者」である。彼らは科に「問題」が発生するたびに集まって会議を開き、新しい規律や処罰内容を作り上げる「元老院」でもある。「問題」とはまさに彼らが願う学年中心ヒエラルキーに亀裂が生じることを意味する。

軍隊に行って来るとみんな軍気のことを口にします……よく使う語彙としては「ジョーシキがない」という言葉や、「集合」のようなものがありますが、これらは軍でよく使う表現だそうです……外国に出てもローマで集合しろと言えば、ローマで「端に寄って姿勢正しく」座っていると云います。（事例1）

毎年除隊した復学生の先輩がいますが、その人の性格や好き好きによって科の雰囲気が変わります……復学生たちは科に秩序がないことに堪えられません……声楽科と軍隊は似ています。後輩が先輩に食ってかかるとかの問題が起これば、復学生たちだけで集まって会議をします。（事例7）

復学生の役割に対する上のような陳述は、他の学校に在学中のすべてのインタビュー対象者からも聞くことができる共通した内容である。違いがあるとすれば、男性の場合は女性に比べて復学生に対する不満や批判の口調が緩いくらいで、たとえば下に引用した事例⑥、⑦、⑧のように述べるのが普通だ。

声楽科の中にある強圧的な文化に対して、いいとか悪いとかでの判断はしにくいです。今の学生なりの文化ですよ。私たちの世代もその上の世代を見れば違うように……復学生が主導するこの文化を理解しなければならないようです。（事例6）

音大の中で民主的雰囲気ができつつあるということは時代的な流れだけれども、しかし必ずしも望ましいことではないと思います…… 後輩たちは民主的な雰囲気が楽だろうけど、先輩の立場からすれば決して良いことだけではないようです。(事例7)

軍隊みたいに強圧的なことがある程度はなければならぬと思います。強圧的じゃないほうが楽です…… でも時間が経つと、それが良いことだけではないということに気付いていきます。(事例8)

男子学生たちが軍事文化を擁護する理由は、自分たちも復学生の位置にいつかは立つことになるはずだという計算のためだが、復学生ではなくとも同期の女性に対してヒエラルキー的位置を占めることができる軍事文化のジェンダー・ポリティクスの中かで得をするからでもある。声楽科内での垂直的性別ヒエラルキーも問題だが、水平的性別ヒエラルキーはさらに深刻だ。女学生たちを「直接」統制するのは、水平的関係にある同期の男子学生たちだからである。

全体が集合してから「お前ら、男たちが頭打ちこむ⁷⁾の見てみろ」。そういって、頭打ちこみをさせてお尻を叩くことがあります。頭から血が出たりします。ある人が、鼻血が出て呼吸困難になって気を失いかけたこともあります。別のところに女の子たちを姿勢正しく座らせておいて、女の先輩たちが「本当に悲しい、情けない……あなたたちが少しでも上手だったら集合する必要もないし、男の子たちがあんなに苦勞する必要もないんじゃない」と、女学生たちに罪の意識を植え付けます。(事例1)

男子が怒られている時、女子はただ首を垂れていました。とてもすまない思いで……。今思えば、そうなることを意図していたんです。(事例3)

男の同期たちが、私たちが着ている服を見て「それ何だ？俺たちまた集合させられるじゃないか！」と言って、私たちの着る服まで口出しするけど何も言えません。私たちのせいで罰を受けるのが事実だから。(事例4)

このように、女性は男性に罰をもたらず「悪」として意味付けられ、男性による女性統制とそれによる水平的関係の性別ヒエラルキー化は「自然に」なされる。これは事例③が指摘したように、復学生たちが「意図する」ことだ。男性が女性統制を狙っていることを見破っているにもかかわらず女性たちが連帯してその意図に抵抗することができない理由は、先輩女性の中には「例外女性になること」を実践する人がいたり、チョ・ジョンア(2001)の指摘のように、男性中心的組織文化の中かで女性たちのアイデンティティが順応的に変化するからだろう。結局、各自が経験する不当な経験に対して共感帯を形成することができないので、一つの声を持つことができない声楽科の女学生たちは、男性中心的秩序と統制のもとに置かれ続けることになる。

大卒女性に対する「職業意識の欠如」という偏見的判断に対してチョ・ジョンア（2001）は、女性に「ビジョンがない」組織、性差別的労働の本質、組織生活の中で構成される変化したアイデンティティなど、女性労働者たちを取り囲む男性中心的組織文化を批判している。男性中心文化の中で女性たちは、抵抗と挫折を通じて諦めたりその文化に順応しもするし、場合によってこのような過程は退社につながることもある。チョ・ジョンアはこれを強制された決定とみなす。女性から強制的に構成員としての資格を剥奪する男性中心的組織文化は、大学でも例外ではない。男性中心的文化の中で女性たちは専攻を変える決心をするか、専攻にとどまるとしても、専攻の中心人物は男性であること認識していく。

ムン（Moon, 2003; 2005）によれば、男性中心性は韓国の性別ヒエラルキーと関連しており「保守的民主性」を形成した。声楽科で見られたのと同じ垂直／水平関係における男性中心性は、韓国の近代化過程で強化され、大学に「移植」されたともいえるが、むしろ大学でのジェンダー・ポリティクスを通じて社会で再生産・強化されたという解釈も可能だろう。このような解釈はチャンドラ・モハンティ（Mohanty, 2004）が指摘したように、大学がグローバルな資本化のなかで触媒役割をしているという点から類推することができるが、韓国の男性中心的・非民主的な企業文化が相変わらず女性を差別して「軍必」⁸⁾ 男性を最も望ましい組織員として優待している限り、大学はそのような条件を満たす人口を生産しながら企業と社会のジェンダー・ポリティクスを再生産・強化するべく期待されている。

垂直／水平の性別ヒエラルキーが存在する空間において、セクハラ〔性的嫌がらせ〕は予想せざるをえない経験である。

権オープン（2000）は、女性が男女共学大学の中で「特別」扱いされることはあるものの、それは彼らだけ特別に「除外」されることを意味すると指摘する。女学生たちの中には男性の連帯からの排除を乗り越えるために男たちの「粘っこい」関係に入り込もうと努力する人もいるが、その努力は男子学生たちからの「セクハラ」を受容することとの境界を曖昧にし、女学生たちを困難な状況に追いやる。男性中心社会では男女の関係を私的なことに限定するがゆえに、企業や組織など公的領域における男女関係の文化的シナリオはなく、これは男女共学も例外ではない。このような文脈で男性先輩・後輩の「粘っこい」関係は権力の継承と維持を生じさせるが、「親しい」男女関係での権力の移動はない（金ヒョソン, 2003）。それにもかかわらず後輩あるいは同僚としての立ち位置を確保するために、女性たちは男性たちの「粘っこい」アプローチを仕方なく受け入れたりするものの、それによって女性たちが権力を持つようになることはない。

男の先輩たちが女の子にとっても密着して、ひどく抱きつきます。抱きつかれた人は笑わないとだめ。「先輩、あ～、もう、やめてくださいよ。わかりましたよ～」。こんなふうにはできません。オペラアクティングの模範を見せてくれるとって手をぎゅーっと握ってキスするポーズとか、抱きかかえるポーズみたいなことを見せてくれるんですが、練習の時じゃなくて酒の席みたいな、とても私的な席でまで、なんでそんなことをするのでしょうか。（事例1）

先輩たちが歌を教えてくれるときに、密かに体にたくさん触りながら説明することがあり

ます。気分は良くないですが、特に言うこともないです。(事例2)

男の先輩たちが女の子たちに「お前は どうしてこんな顔になったんだ」と言います。これくらいのことは笑って済むくらいのいたずらになったし、どうしてこんなに胸がないのか、みたいなことも言います。それもそのまま笑って済ませます。ミニスカートをはいている子には「何でスカートはいてるんだ？おかしんじゃないか？ダイコンが歩いてるぞ。脚線美イカすね〜」とか言って……いちいち列挙できないくらい日常的で、セクハラは。(事例4)

以上のように、声楽科で構成され強化されるジェンダー・ポリティクスは再生産機制を必要としているが、それは軍隊と特に差のない多様な方式の「軍気」によって可能となる。「軍気」を維持する手段は個人の人間関係や「身体」を管理することから、暴力と世話の繰り返しに至るまで多様だが、これは国防省ホームページ(www.mnd.go.kr)に見られる「兵営文化改善」「人間中心の兵営文化」などととも「このごろの軍隊はかなり変わった」という一般の評価に鑑みるなら、ともすれば声楽科内の軍気のほうが軍隊よりもひどいかもしれないという推測も可能だろう。声楽科内部の軍事文化を類型化すると、以下のようなになる。

3.2 声楽科の軍事文化の類型

軍隊で先輩は後輩のガールフレンド、恋人、妹など後輩の周辺のすべての女性について知りたがる(李ドンフン, 2001)。後輩たちは先輩の性的好奇心を満たすために自分の性経験を膨らませて話したりするが、この過程で女性の身体は過剰に性愛化され、モノ化される(権オープン, 2000)。この時、後輩の異性愛の人間関係は先輩たちに(嘘でも)一つ一つ公開されていき、すべて「先輩のモノ」になる。声楽科の中でもこのような現象は一般的である。

① 私的人間関係の管理

他の学校もそうですが、声楽科はとても保守的です。CC (campus couple) して別れてみようものなら、科の雰囲気は完全に台無しになります。それで私たちの場合は先輩がCCを禁じています。(事例8)

例えば新入生MT⁹⁾に行けば「君たちの期で何カップル以上作って来い」と言われます。めっちゃめっちゃな話でしょう？(事例10)

オペラをすると、一か月間夜9時までずっと一緒にいるんですよ。そうなるとうCCができます。先輩たちはそれが許せません。だから学校やめたり、軍隊に行った人もいます。(事例2)

上記3人のインタビュー内容は一貫してはいない。しかし、「恋愛」が先輩によって助長されるのであれ抑圧されるのであれ、それは私的人間関係の管理と統制という側面で同じレトリック

である。それに、そのやり方は事例①と⑤が述べるように性差別的で、その差別の主体は先輩女性でも男性でもありうる。

男性中心的組織文化の大きな特徴のうちの 하나가、女性の妊娠などを個人的な決定として先延ばしにしながらも、その決定過程に組織が深く関与し、結婚と妊娠が組織を去らねばならない理由になるように仕向けることである¹⁰⁾。私的なことに対する公的領域の介入は「保護」という積極的行為ではないならば、それは「侵害」の性格を帯びる。私的領域に対する科単位の侵害は声楽科の中では日常的だが、その侵害の仕方が性差別的である。

女先輩たちは女学生だけ別に集めて女の後輩に「あんた、練習室で抱き合ってたって？ そんなウワサが立てば女だけが損するのよ〜」。こう言ってカップルに対するイライラを表わします。（事例1）

声楽科は科カップルが多いけど別れるとよくないですね。特に女の子に……。うわさに尾ひれがついて、その子がまるで性売買女性になった……。そんなイメージを先輩たちが作り上げます。（事例5）

軍隊で先輩が後輩の異性愛的人間関係まで介入する理由は、私的な所までの介入が可能になってこそ後輩に対する「完全な」統制が成り立つからだ。その完全な統制は、戦争遂行を成功させるための必須条件である。同じ論理で1〜2年に一回発表するオペラを成功させようとする先輩が声楽科の「軍気」を正す方法は、後輩たちの異性愛的人間関係まで統制することである。軍隊でもない所で「軍気」を正すという意図で先輩たちが強制したり介入したりする中身は、人間関係にとどまらない。

② 身体的規律

先輩の前でタバコを吸ったり、恋人とイチャイチャしたり、無駄話などはできません。「韓国の文化」ではそれが絶対許されないからです。それは何でもありませんが科の雰囲気のためには重要です。（事例8）

男子学生の場合、学年が下ならピアスもできません。耳に穴をあけていると先輩たちがピアスはずして来いと言います。私たちには服装規制があります。年下だと短パンもミニスカートもサンダルもダメです……。1, 2年生の時は車やバイクで通うのもダメです。（事例9）

帽子をかぶっていても先輩が通り過ぎるとき「帽子かぶってたな〜」と言われます。目障りだ、っていうことですよ。集合の時にも必ず指摘されます。（事例3）

先輩の前で座る時は椅子にもたれてはダメです。先輩の前で携帯電話が鳴っても受けられ

ません。電話に出ている時に先輩が通り過ぎると、すぐ耳から電話を離してあいさつを先にしなければなりません。(事例1)

ことある毎に先輩の統制と規律が介入すれば、いつのまにか後輩は先輩の不在時にも自己検閲するようになる。先輩による統制と規律は、声楽科の新生が大学に足を踏み入れてから「プログラム」の性格を帯び、すぐに始まる。しかしこの「プログラム」というものに、大学ごとの違いはほとんどない。それは、プログラムを立てて実施する人が皆一時期「同じ」空間、すなわち軍隊を経験したからである。

③ 恒例の「プログラム」；対面式，オリエンテーション，セミナー，相見礼

入学するとすぐに「対面式」というのをします。新入りの子たちの顔を見てみよう、というわけです。対面式の目的自体が軍気を正すことです。対面式は新生とすぐその上の学年が主なメンバーで、高学年たちが来て腕組みをしながら後ろで眺めてる雰囲気……。そこで「声楽科は常識が通じない所です」と言われました。(事例1)

幼稚だけど、初めて学校に入って来れば仲良くなるための行事以外に一つの「プログラム」で気合いを入れることがあります。ひどいことではないけど間違った時にはこのような罰があるよ、と例示してくれるのです。団体生活の訓練をさせようとする意図です。(事例6)

「プログラム」としての暴力は学校ごとに程度が違うだけで、類似の様相を帯びており、またその意図が先輩による後輩の統制という面で共通している。事例①が言及したように、それは「常識が通じない所」すなわち聖域化された場での「常識」だ。後輩に対する先輩の統制は後輩の人格をモノ化しながら行われるが、その中の一つが、後輩に先輩を「楽しませる」という任務を付与することである。李チュヒ他(2004)の管理職女性の仕事経験についての研究において、男性は上司の「やれ」と言う命令を無条件に遂行するという点が、女性との差異として指摘されている。李ウナ(1999)は男性のこのような点を「忠誠」と表現しつつ、それはすなわち「命綱」であると解釈する。声楽科において先輩が後輩を統制するのは、先輩に対する「忠誠」の度合いを確認するためでもあるが、後輩が「忠誠」を表現する方式は、男性的であるか男性を楽しませるものである。したがって、この「忠誠」のテストが男子学生に有利なのは当然である。新入男子学生たちはこの過程を経て先輩が用意した「命綱」をつかんだメンバーになっていくのである。

対面式では個人ネタをさせます。何が何でも先輩を笑わせなければならないんです。普通は「セクシーダンス」や「面白い踊り」のようなことをします。先輩たちは笑ったり「あいつは何だ」みたいに渋い雰囲気を作ります。(事例2)

入学すると3月中〔韓国では3月が新学期〕にすぐに2泊3日のセミナーに行きます。到

着するやいなや1年生が個人ネタをします。男たちは醤油を飲むとか、変なこともします。たくさん壊れるほどたくさん笑って面白がります。去年、ある男子学生は赤ちゃんの真似をしながら服を一枚ずつ全部脱いで、おむつみたいなものだけつけて歩き回りました。教授たちは何もせずに見ているだけです。（事例3）

新入生の時、一週間ほどを毎日ずっと通います。集合するんです。そこで大声で、何年の誰で何先生の弟子です、よろしくお願ひいたします!! というように「申告」〔軍隊で呼ばれると、返事と同時に所属部隊、階級、名前を言う習わしがある〕を学びます。申告式してその次から寸劇をすとか、個人ネタもして、先輩たちを笑わせなければなりません。（事例9）

先輩による後輩たちの統制は任意で行われるのではなく「伝統」的な内容として自分が学んだことをそのまま後輩に伝授する形式を取る。「きちんと」伝授されないと考えられる場合、すなわち「プログラム」がきちんと施行されない時、次の事例⑦が述べたように先輩は後輩に物理的暴力を振るう。

新入生との相見礼〔通常は結婚前の両親の顔合わせの意味で使われる言葉〕にはみんな黒スーツを着て、新入生が舞台上に飛び上がってひとりずつ自分の名前と指導教授の名前を言って自己紹介しなければなりません。この時、のどが割れるくらいの声で言わないと通過させてくれません。この前は殴ったりしていました。練習後に倒れて病院に運ばれた人もいました。気に入らなければ、男子学生は頭うちこみをして、女学生には見て見ぬふりをさせます。自分が学んだとおり、まったく同じようにするんです。（事例7）

復学生たちは暴力的「プログラム」を削除したり修正するという意図を持っていない。「プログラム」自体が「常識が通じない所」（事例1）での「集団活動」のための善だからである。定期的な「集合」と「殴打」もまた善を実現するための正当な道具である。

④ 集合と殴打

声楽科メンバーではない第三者に、軍隊だからあり得る、あるいは軍隊でもあってはならない「集合」と「殴打」が「知性の空間」たる大学の日常として想像されることはない。しかし「集合」のために約100人以上のメンバーが一人の欠員もなしに集まるということは、声楽科の中で占める「集合」の価値と意味がどれほどのものなのかを示している。

集合には音楽学部声楽科が皆集まります。親が亡くなったとか、避けられない事情ではない以上は、欠席すればまた集合させられる原因になります。（事例6）

今はほとんど集合がなくて学校に楽しみがありません。私も昔、集合させた時には、後輩

たちをたくさん殴りました。顔みたいところは殴らないで、先生が殴るようにお尻を叩きます。(事例8)

ウチらの場合は、ある程度暴力的な部分もありました。ひどすぎるわけではなく、角材などを使って脅かすとか……。女はひざまずかせるとか、男は騎馬姿勢とか伏せさせたり、ちょっとやりすぎるときには頭打ちこみをさせたり。昔は本当に暴力があったんです。(事例6)

事例⑧と⑥が言及する「昔」がどの時点なのか明らかではないが、彼らの口調には「最近はよくなった」というニュアンスが込められている。だから最近は「世の中が変わって」暴力を振るうことができないし、そのため「楽しみがない」と言うのだ。しかし事例⑩と⑨は、まさに先学期(2006年1学期)に先輩たちに殴られたと述べる。

アイス・ホッケーのスティックで尻を5発殴られました。99〔年入学生〕が00を殴って、00が01を殴ります。(それでは01はまた02を殴るんですか?) いいえ。殴ることができる学年は今、01〔年入学〕までです。(事例10)

拳で殴れば跡が残るから手の平で次から次へと殴ります。学期中に後輩のできなかったところに目をつけておいて、休みの前の集合で半期決算として殴ります。(事例9)

羅允慶(2005b)の男女共学大学における軍事主義に関する論文には、機動隊〔戦警、戦闘警察〕出身のある復学生が軍隊時代を回想しながら軍隊には「許された記数」¹¹⁾がいると述べた内容が引用されている。その意味は、軍隊である程度の年を経た時(除隊約3～6ヶ月前)は後輩に対する暴力が「許され」たと言えるほど自由だということだが、事例⑩によれば、声楽科にも暴力を「許される学年」(01年入学まで)があるのだ。暴力の行使ができる正当な理由は彼らの学年〔学番〕¹²⁾が高いということであり、声楽科の学年中心ヒエラルキーは軍隊の記数中心階級ヒエラルキーと類似している。

⑤ 学年中心のヒエラルキー

声楽科は軍隊とまったく同じです。1年生は二等兵、2年生は一兵、3年生は上兵、4年生は兵長です。そして軍隊を除隊した復学生たちは4年生より上です。(事例9)

私と一緒に入学した人の中に三十代の子持ちのお母さんがいました。この人が声楽科のルールを知らなくて、年少の先輩に気軽にタメ口で話をしたんです。すると集合がかかって、その人に「学番も低いのにどうして接し方が雑なんだ、おばさん、年取って入って来たのがそんなにエライの?」って。その人は呆然としてそのまま何もいわずに、それ以降はタメ口じゃなくなりました。(事例3)

集まるといつも学番同士で座ります。椅子が三つの区域だったら、両側パートは先輩たちが、中間パートは新入生たちが座ります。新入生たちは前だけ見てじっといなければならない。（事例2）

学年中心のヒエラルキーの中で、高学年は低学年に暴力を振るうが、「上意下達」と「年功序列」の原則が破られることが、暴力の理由となる。

2002年ワールドカップを学校のOO館で座席100～200席を取っておくから一緒に見ろって言うんですよ、先輩たちが。ところが集合で先輩がポーランド戦に来なかった人は手を上げろ、アメリカ戦に来なかった人は手を上げろと言って、そうするうちにある人に、お前は何だ、手があがりっぱなしか？って言いながら殴ったんです。ワールドカップを一緒に見なかったことが殴る原因になったんです。（事例9）

地方行事に参加して合唱をしたんですよ。自分の車を持って行った人々が多かったけど、行事が終わってパーキングチケットを低学年たちが全部持って行ったという理由で、先輩たちが怒っていました。最初に入って来るときからホッケーのスティックを持って来ていました。殴ろうとしていたんです。（事例10）

しかしさらに驚くべきことは、暴力の理由ではなく暴力が声楽科内部で女性と男性の両方に意味化される方式である。それもまた軍隊とかなりの部分で類似している。

⑥ 集合と殴打の意味づけのされ方；愛情表現，メンバーシップ獲得過程

そんなにひどすぎるわけではないんですが……。誰でも一人が前に出て軍気を正してこそ学校が回っていくんですよ。殴ったりしてもその人たちが面倒を見てのりも確かだし。留学に行ってもそうです。結局、その先輩たちのお陰で誇りも感じられるし。（事例2）

学校に通う時は軍気を正したりとか、そんな人がとても嫌いだったけど、卒業してからはそれもある程度必要だと感じます。集まりと集合が多くなって自分も知らない間に情が湧いたんでしょう。集合する時はいじめて、そんな人が後で留学に行くとても後輩の世話を焼いてくれるともいいます。（事例3）

先輩たちに最初に殴られた時にはアザができて、次にまた殴られると血が出てパンツが尻にくっつきます。そんな時もあったけど、今でもその先輩たちに連絡しているし、その先輩たちが懐かしくて、先輩たちもたくさん面倒をみってくれるし……。よく分からないんです、この感じ。（事例8）

声楽科の先輩の暴力は男性の間でのみなされたという一種の「共謀的」性格を持つ。このよう

な共謀の中での暴力は、後輩が先輩と結ぶ「学縁」¹³⁾の代価として支払ったものであり、それは卒業後に学縁による恩恵として返ってくる。学縁の恩恵は、もちろん先輩が後輩の「世話や面倒」¹⁴⁾をみるという形式を取るが、この時の世話はまた先輩の権力感維持のために道具化される。この過程は男性中心の企業文化で「同士文化」(チョン・ユソン, 2001), あるいは old-boys-network の形をとって現われることで女性排除の機制となるが、声楽科の中でもこれは同じく作動する。

声楽科の学生メンバーたちが復学生生の支配体制に対して不満を持ったり抵抗できないのは、後輩に向けて暴力を振るった彼らがまさに後輩の面倒もみるからである。暴力と世話の主体が同じだという矛盾が生じるが、声楽科内部ではその矛盾こそまさに常識として暴力を受容する理由になる。暴力と世話する主体が同じだというこの矛盾は、韓国社会が教師の暴力を正当化するために作った「愛のムチ」が持つ矛盾と似ている。この矛盾によれば「たくさん殴る人こそたくさん愛する人であり、たくさん殴られる人こそたくさん愛される人」になるのだ¹⁵⁾。したがって暴力の直接的対象にならなかった女性たちは「格別の待遇」を受けて「特別な差別」(李ドンフン, 2001)の対象になりながらも、世話においては「列の外」に置かれる。暴力が内部構成員としての資格を付与する機制であり、暴力と世話の主体が同じであるほど、暴力の対象ではない女性たちは真の内部構成員の資格を持つことができないのである。これはまるで暴力的な軍での義務期間を経た男性にのみ近代的市民権を付与する韓国の憲法の「国民たる条件」を反映しているかのようである。

男性たちだけが「真の」内部構成員としての資格を持つことになるこのような文脈では、居酒屋、ルームサロン、サウナなど男性たちだけが経験する非公式的文化を積極的に受容し、それを活用する人だけが「公式メンバーシップ」(李ウナ, 1999)を持つ男性中心的組織文化を構成する。もちろんこの過程から女性は除かれており、男性の連帯はさらに強化される悪循環が作られる。このような点から、男子学生だけが該当する男女共学大学の軍事主義的暴力性は、社会と組織の男性市民権を構成する前哨作業と言える。

3. 3 声楽科における軍事文化維持機制

先述したように約10年前の声楽科内部の軍事文化的暴力性はテレビを通じて世論に明らかにされたが、その様相は変わらなかった。声楽科内部で暴力が維持される機制があるからであるが、本研究ではそれを二つの点から分析している。

一つは声楽科教育課程の中で「団体活動」を要求するオペラがあることで、オペラを遂行しなければならない「他律的」な学生たちがいるという事実である。ひとつのオペラ作品の準備のために必要なのは画一化された秩序だといわれるが、オペラに対する軍事文化的説明体系もまた男性たちにおいてより著しく、甚だしくは事例⑧のケースにあるように、オペラの舞台は「戦場」のように描かれもする。戦地で軍人が最も安全に生き残ることができる方法は軍気を維持することであり、その方法は軍人たちにとって唯一無二である。声楽科の「他律的」な学生たちは、まさに軍人と化し声楽科の軍気を受け入れねばならない。また軍人が実戦に備えて日常的に団体訓練に臨んでいるように、声楽科内部で後輩は少しの面識もない先輩の冠婚葬祭などに強制動員されることで「集団性」を訓練される。

軍事文化的暴力性が維持されるもう一つの機制は、声楽科の暴力が「エリートたちの伝統」として美化され、この伝統ならぬ伝統を維持するために声楽科をめぐるあらゆる「利害当事者(stakeholder)」——学生、教授、親はもちろん大学もまた無知と無関心によってその「伝統」を維持するのに動員されているという事実だ。この「エリートたちの伝統」を否定することで支払うことになる代価は、男女問わず声楽を専攻できなくなるほど致命的なものになりうる。そのため、学生たちは暴力という「伝統」から逸脱せず、その逸脱を阻むことに教授、親、そして学校が影響を与えているのである。

①「戦場」オペラと「集団性」を維持する慣行

オペラをする時、緊張しなければならないんですよ。頭の上から何かが落ちてくることもあるし……。舞台装置とかのために緊張をしなければ舞台上で死ぬことだってありますから。緊張を維持するのに一番楽な方法は軍気を正すことです。軍気以外に他の方法があれば良いけど、他の方法がありません。(事例8)

全体的な調和を作るための別のやり方を模索できないほどに声楽科における「軍気」はすでに長い「伝統」になっている。軍隊の軍気によって一時「柔順な」体を鍛えた復学生は、その効果を知っているだろうから、それよりも良い代案が考えつかない。復学生たちは軍気を正当化する集団活動のオペラ以外にも、声楽科だけの「そもそもの要因」があるというのだが、それがまさに声楽科志望生がその時まで経験してきた教育方式である。事例⑧は他律的な文化を必要とする理由について、アメリカの学生たちよりも「劣等な」韓国声楽科学生たちの「国民性」とまで言う。

大学入学試験のためだけの小中高など学校教育に問題があると思います。高校時代まで他人の意志によって勉強をしてきたことを思えば……。大学に入って自由になって、それで自律的には素敵なハーモニーを作り出すことができなくなったようです。だから他律的にも強圧的にも、引っ張っていかねばなりません。(事例9)

韓国の人ってそうでしょう……。音楽をする人々の国民性自体がそうです。アメリカみたいなならいくら遊んでも練習する時になれば来て、ばっちりやるのに、私たちの場合は30分遅れて来て遊んでいく、そういうふうになります。(事例8)

自分たちが大学でまで実践している軍事文化を正当化するために、復学生たちは韓国の教育方式はもちろん、声楽専攻学生の傾向までも批判する。声楽科の学生の傾向を本質化することで自分たちの暴力を正当化する彼・彼女らとのインタビューにおいて、自己省察の可能性は見えない。問題の本質は、客観化できないほどに軍事文化を内面化し、それを唯一の価値体系として持っている自分たちであるにもかかわらず、復学生たちはこれを省察しない。

これらはまたオペラ公演には団結〔団合〕が必要だから、日常生活にまで集団主義を強要する。たとえば、面識もない先輩の冠婚葬祭への「必参」がそれである。このような家族行事への、家族ではない声楽科メンバーの必参は、家族のような強い結びつきを強調することで団結を強制しようとするもうひとつの試みである。

ある女学生のお父さんが亡くなって、いざ本人はみんなが葬式に来るか心配で何も言わず、科の助教にだけ話したようでしたが、それが同期の耳に入り、その同期は言わなければ後で男の先輩に怒られるかと思ってすべて話したんです。葬式に行けばいろいろ手伝って、歌を歌って、男子学生たちには出棺もさせます。授業も自分たちでどうにかしてサボらなくちゃならない強制的雰囲気です。その女学生はそういうことがわかっているから、当然、重荷だったのです。(事例1)

葬式に行くと、ただ先輩のそばにいてあげて、使い走りみたいなことします。後輩の役割です。声楽科はだいたい100人ですが、ほとんどみんなが行きます。男たちは夜を明かして出棺まで一緒に行くんです。あまりにも多いと大変だから、だいたい30人くらい。私たちはそういうことにすごく誇りをもっています。(事例8)

先輩の結婚式に後輩たちが行くのは私たちの伝統的なやり方ですが、顔も知らない先輩でも行かなければなりません。ここで抜ければ、それも一つの集合の理由になります。(事例6)

女性校長・教監についての研究で羅任允慶(2003)は、女性教師の「能力」を判断する基準のうちの一つに同僚や同僚の知り合いの冠婚葬祭への参加があることを指摘している。育児や家事に対する責任のために葬式での徹夜や地方での結婚式に参加できない女性教師は、同僚愛のない利己的な教師との烙印を押される。したがって、女性化された職業のうちの一つである教職でもやはり女性はメンバーとしての資格をもらえない。これと類似の文脈で、同僚の知り合いの葬儀で徹夜も出棺もできない女学生が、声楽科の真のメンバーになることは簡単ではないだろう。

常識的に考えれば、オペラの準備過程に必要なのは音楽への愛情と情熱、自由な芸術魂、まじめな練習や努力あるいは才能などだが、オペラについて語る時にこのような常識に言及するインタビュー対象者はただの一人もいなかった。むしろ男性インタビュー対象者は軍気、集合、団結、強制などが音楽への情熱や芸術魂を育て、オペラを成功させると考えている。このような過程が誇りとして意味づけられる限り、声楽科内の軍事文化が変化する可能性は薄いだろう。

②「エリート」だけの「伝統」としての暴力、伝統を守る利害当事者たち

G 大学声楽科だからこの後に必ず学閥で得するだろうし、だからここで疎外されれば大変なので、ここから出ていきたくなければペコペコして上手くやれ、といった感じです。そのためか、実際に先輩に殴られることに対して、私的な場でも不満を吐く男子学生を見た

事はありません。（事例1）

誰でもみんな暴力にあうのを嫌がります……。ところが何人かの先輩は互いに殴り殴られることがすべてE大学だけの伝統だ、あるいはウチの大学はこうだということをプライドと思わせます。ある先輩は殴りながら「E大学声楽科、良い学校か悪い学校か？」と言って、殴られる子たちは「良い学校です！」と返事をしなければなりません。W大学声楽科〔別名「地方」大学〕ではすでに（暴力問題が）なくなりました。下の学年が自分たちだけで集まって先輩の言うことを聞かないと言うんですよ。けれどもE大学は一流大という誇りがあって、そうならないのです。（事例10）

集合して叱りつける度に先輩たちが言います。私たちがこんなに軍気を正しているからこそ、ヨーロッパの田舎都市に行ってもD大学の先輩・後輩・同窓のいないところはない、と……。学校に対する誇りが感じられるように、口うるさく言います。だから私は、ひどい話を聞いてもこれはすべて我が校の伝統を守ろうとしているんだな、と思います。（事例2）

男性後輩に身体的暴力を加えたり、女性後輩たちに単に「口やかましく」言う時にも、それをエリートとしての集团的アイデンティティを持たせる不可避な手段として正当化する復学生たちは、「伝統」を脱した時の「代価」もまた大変なものだと後輩に認識させる。こうすることで後輩たちの「伝統」逸脱の危険を防止するのである。逸脱の代価はマクロでもミクロでも致命的である。

自分が〔集合など先輩に従うことを〕したくないと初めから宣言していた子です。自分の好きなようにしたければいくらでも勝手にしろと言います。その子は永遠に列の外です。一言で、ハブです。（その人は卒業したらどうなるんでしょうか？）市立合唱団みたいなどころには行くのも難しいでしょうね。全般的にその子が音楽をするにあたって誰も気を使ってくれないでしょう。（事例8）

先輩たちに服従せずに自分のしたいとおりにした人々は、ほとんどが音楽をせずに、女性の場合は結婚して、男性の場合は他の事をするとか。だいたい7割はそうです。合唱団に入っても、そこでまた問題が起こって首になるとか。（事例6）

事例⑧と同じ学校に在学中の事例⑤は、復学生たちが「伝統」から逸脱した人々を排除するために他の後輩学生を扇動していると言う。扇動される過程もまた、後輩には「伝統」に従わなかった時の代価を十分に熟知させる過程となる。

垣根の中から外に出た人、その先輩〔上記の事例⑧で言及された女性〕のような人は、先輩たちから声楽科扱いされません。また私たちにはその先輩にあいさつもするなど強要します。その先輩は、歌も熱心だし勉強もすごくできるんです。その先輩は英語の発音も良

くて、英語も上手だから留学するだろうに、引っ張ってくれる人がいなくて、どうなるかわかりません。(事例5)

低学年男子学生の場合、軍隊に行ってきた人々もたまにいますが、これらもまた学番が低い場合には学番が高い復学生たちに従うしかない。これらも「伝統」から脱することはもちろん、「伝統」に対する不満を口にするにはできない。それに対して不満を持つということさえ「伝統」から外れることだからである。

私は軍隊にも行ってきましたが、学番は低いです。だから何も言えません。うわさがめぐりめぐって最高学番に私が不満をたくさん持っているという話が入れば、矢が飛んできます……。これが、狭い世界だから危ないんです。私が完全に声楽科に背を向けて、もう音楽をしない、と考えない限り仕方ないでしょう。(事例10)

このように、声楽科の「伝統」を否定した時、その人が支払うことになる代価は、科の中での生活がスムーズにいかなくなるということだ。先輩はもちろん同期たちからも背をむけられ、時には音楽を自分の専攻としてやっていけなくなる結果をもたらす。芸大の専攻は専門家(specialist)教育を目標としており、他の専攻とは違ってその専門領域ではない別の場でのキャリアを想像しにくい。キャリアビジョンの制限によって、学生たちはその「伝統」から脱しにくくなる。

他の科はある程度勉強したと言えればそれに合わせて就職もして、行くところもあるのに、音楽や芸術になると一流大の声楽科を出ても何もできない人もいて……。就職するのも抜群に優秀じゃないとできないので。留学して帰ってきてもまた韓国での居場所は見つけにくい。だから先輩たちに目をつけられるのが怖い。軍隊は2年間だけの関係だけど、音楽学部は最後まで関係が影響しますから。(事例10)

私たちは卒業後に音楽関係じゃなければ〔就職〕するのが大変です。だから付き合う人も限られているし、決まっていると思います。この分野はとても狭いから、そうであるほどもっと頑張らなくちゃならない。そんな強圧的な秩序が維持されていると思います。それが嫌で、チョ・スミさんは卒業しないで留学したんです。韓国で活動せずに。(事例4)

学生たちのキャリアビジョンは、彼・彼女らが声楽科に入学するまで心理的、経済的負担を甘受した親たちにとって最大の関心事に違いない。親たちも声楽科の中で自分の子が「成功」することを願っており、その成功プロセスのうちの一つが、彼らが声楽科の「伝統」から脱しないことであるということをよく知っている。声楽科の学生たちの親はその「伝統」に対して口を閉ざすことで、それを維持させている利害当事者の一部である。

学生たちが自分の立場から学校で起きた事を親に言わない場合もあるし、親も家では怒り

狂うことはできても、どんな結果になるのか見当がつくから、公式に問題提起ができないんです。（事例1）

女学生たちは殴られないからです、親に言わないのは、でも言うとしても両親が電話したりとかいうことはないみたいです。それでも親はある程度知っています。軍隊でもなく体育大でもない大学でこんなことおかしいですが……。E大学だからそのまま通えっていうでしょう。三流大学だったら今すぐ退学しろっていうそうです。でもE大学だから。先輩の言うことをよく聞けば、自分の子たちがよくできるようになると思ってます、親たちは。（事例10）

実際、声楽科の学生の「伝統」に対して親が学校に抗議するとしても、その抗議を受け入れて反映させ、「伝統」の内容を民主的に改革するには教授の努力が絶対的である。事例⑦が在学しているB大学声楽科は4～5年前にはソウルで最も「軍隊みたいな」所だったにもかかわらず、声楽科の「伝統」に対する一人の批判的な教授によってその「伝統」はもはや影響を発揮できなくなった。事例③は、事例⑦と同じB大学声楽科出身で、現在は他の大学の大学院に在学中だが、彼女もB大学の声楽科の「伝統」が再構成されるようになったきっかけについて、同じ教授の名前を口にした。これらの陳述からは、「伝統」を作り直すのに教授の役割は絶対的だが、もし教授がそれを守る側につけば「伝統」はさらに強化されるしかないことを示している。

〇〇教授という若い人がいたんですが、芸術は強圧的なものでもなくいいって、私たちが信じてくれていて、その人のおかげでウチの学校は今は強圧的な雰囲気はないと思います。ほとんどすべての学生たちの行事にその教授が参加してくれて……。芸術というのを抑圧的にするのは良くないと言って、先輩・後輩間で良い姿を見せてほしいと言って、3～4年前から柔らかい雰囲気です。（事例7）

〇〇教授が学科長になってから雰囲気がとてもよくなりました。教授間でもある程度既存の硬いルールはなければならぬと思う人もいて、ちょっと年をとっている先生は自分たちもそう学んできたから、ある程度は先輩・後輩間のルールがなければならぬ、と。若い教授は自分のすべきことをちゃんとやればいいっていう人で、それでも〇〇教授のように積極的に民主的な雰囲気を作ろうとする人はいませんでした。（事例3）

しかし残念なことに、インタビュー対象者が在学中の別の大学の教授たちは、B大学の〇〇教授とはかなり違っており、ある学生たちは教授が声楽科の「伝統」問題を解決できると思っていない。事例④の陳述によれば、教授の性別によっても「伝統」に対する理解の度合いは異なり、またある意味で一部の教授は学生たちが持っているその「伝統」に頼ることで教授活動をやりやすくしているという疑いを持たれてもいる。

誰も教授たちに強圧的な雰囲気について言いません。そうすればまた自分たちが先輩に

やられるから。教授は、はっきりいって全部知ってるけど、それを全部防ぐことはできないと思います。たまに歩き回って学生たちが集まっているのを見て入って来て、何をしているのかと聞くんですが、「明日の祝歌のお知らせをしていました」って言えば、そのまま行っちゃいます。(事例2)

ある先生は、学生の授業態度が良くない時に「君たちちょっと集まらなくちゃいけないな、ちょっと集合しなければならない」と言います。ある教授は、遅刻した学生に対して笑いながら冗談でも言うように「先輩たちに殺されるぞ」とか言うんですよ。だから教授たちも先輩が後輩を正すという文化が存在することは知っているんですよ。(事例1)

学校のオペラをする時は、教授たちが「気を付け」の意味で高学年や学生会長に言って間接的に集合を示唆したりします。先輩に、後輩をちゃんと指導するように言うんですが、それは後輩たちにちょっと気合いを入れておくように、という意味です。(事例6)

事例①と⑥が言うように、声楽科の学生たちの「伝統」を教授たちは知っているだけでなく、それを使って学生を指導したりもする。したがって、大部分の学生にとって教授は声楽科の「伝統」のせいで経験する困難を訴えることができる相手ではない。その道の「大家」である教授が持つ学生たちとの距離は、男子学生を中心に声楽科の中で実践されている軍事文化を修正できる余地を作りえない。学生たちと距離を置きつつも彼らが作る軍事文化に一定程度依存して教授活動に臨むということは、むしろその文化を強化し再生産することに寄与する。軍事文化に対する声楽科の教授の受容的姿勢は、学生の固有の権利である学習権の侵害にほかならない。特に教授と軍事文化を媒介に、まだしもつながりを持っている「上回生〔高学番〕」あるいは「学生会長」になれない女学生たちにとって、声楽科の軍事文化はさらにそうである。

3. 4 学習権侵害要素としての軍事文化

女学生たちは1, 2年生が終わると科の雰囲気にも慣れ、また「気合い」や「集合」などの対象にはならないので、学校生活がずっと楽になると言う。しかし、慣れるまでの学校生活は、彼女たちに、声楽以外のものを専攻すべきかどうか悩ませる。復学生が存在する男女共学大学の声楽科の雰囲気が、彼女たちには馴染みのないものであるばかりでなく理解できないからである。彼女たちは声楽科が今のような雰囲気でさえなければ、自分たちの専攻にはるかに一生懸命取り組むことができると語る。

毎日スーツで行くから1年生かな、と思いました。1年生の1学期の時は本当に大変で、ほとんど毎日、休学するか、留学するか、でなければ専攻を変えようか、この三つの間で行ったり来たりしてたんです。相談できる人もいませんでした。女子大で1学期のうちに仮面浪人してA大学に入ったのですが、女子大ではこんな問題ありませんでした。ただ女子大では(男役がいないので)オペラができなかったから、共学に来たんです。(事例4)

K女子大学の声楽科は完全に個人主義[個人的]です。だから卒業して社会に出てネットワーキングできないって聞きます。そのせいで男女共学に行ったのに……。殴って殴られてしながら作るのがネットワーキングだなんて知りませんでした。K女子大学に通っていた時は、学校へ行きたくないなんて思いませんでした。でも、男女共学大学に編入して、1年生の間は本当に学校へ行きたくありませんでした。今も全くそう考えないというわけではないですが、その時に比べればずいぶんよくなりました。（事例5）

音大の建物に入りたくない日があります。知り合いに会うのも嫌な日があるんですよ。1階に行くと誰かがいるだろうし、またあいさつしなくちゃな、と考えると……。科の雰囲気さえそうじゃなければ、本当に声楽というものを、私が〔小学校〕5年生の時から関心を持ち始めたこの分野に専心してハマってみたいです。だから留学を考えています、今は。（事例2）

もちろん、声楽科のすべての女学生が学科の雰囲気のために専攻の変更を考えたり学業に専念できなくなるとは言えない。しかし、男女共学大学に入学するまでは全く経験したことのない強圧的軍事文化が、彼女たちにとって民主的で自由な学習空間ではないということと言うまでもない。上に引用した女性インタビュー対象者らの語る内容が男子学生たちによっては言及されなかったという点から——もちろんインタビュー対象者が少ないので一般化することはできないが——声楽科の軍事主義的文化の解釈に性別が大きな影響を及ぼしていることがわかる。少数とのインタビューだが、声楽科の現在の雰囲気が女学生たちの学習を阻害していると断言できよう。

4. 結論

本研究は男女共学大学の軍事主義と男性中心性を明らかにしてきた権オープン（2000）、権仁淑（2005a; 2005b）、金ウンジン（2002）、羅允慶（2005a; 2005b）などの研究と、その文脈をともにしている。これらの研究が明らかにした男女共学大学のジェンダー・ポリティクスに基づく軍事主義の地形をさらに具体的に明らかにすることを目的に、ソウルにある7つの大学の音楽学部声楽科の学生（および卒業生）の10人を対象に、声楽科の「伝統」によって意味づけられる軍事文化についてのインタビューを実施した。インタビュー内容は「自然な」男性中心的性別ヒエラルキー（垂直／水平的関係双方で）、声楽科内の軍事文化の類型、軍事文化維持機制、学習権侵害要素としての軍事文化という4つにカテゴライズできる。

インタビュー内容は、音大音楽科の軍事文化的実践が、男女共学大学と軍事主義をテーマにした先行研究が明らかにしたものよりもはるかに軍隊と類似していることを示した。しかし、軍事文化的実践が声楽科に局限されているわけではないだろう。研究対象にされてこなかった男女共学大学の体育学科もまたかなりの軍事文化的な側面を持っているし、演劇映画学科や美術系学部のいくつかの学科もまた声楽科で見られたのと同じような軍事文化的側面があることを、研究過程の中で知りえた¹⁶⁾。芸術や体育など特定学部の特定学科に局限するかたちで軍事

文化を問題視することは、大学生全体を学科ではなく班中心に編成した大学の構造を勘案するならば、その意味は大きいとはいえない¹⁷⁾。そのうえ、学生が課や班はもちろん、サークルやその他さまざまな学生自治団体を通じて復学生あるいは潜在的復学生である男子学生の軍事文化的実践に曝され、それとやりとりしている点に鑑みるなら、なおさらである。

韓国社会における軍事文化、特に学年〔学番〕や記数中心の序列と上級者による下級者への暴力などは、実際のところ軍隊に行っていない中高生男子などの学生や男女一隊会〔ケンカの強い中高生の集まり〕などの青少年の下位グループでも目撃される全社会的現象と言える。それにもかかわらず、彼らが見せた暴力性や位階性が、軍事文化の再現として問題視されなかったのは、韓国社会における軍事文化の男性中心性、年功序列、暴力性などが特別に名づけられることもないほど「当たり前の社会秩序」(羅允慶, 2005b; Enloe, 2000)として定着してきたからである。また、本研究で示したように、自分が属する組織を保護しようとする組織防衛、軍事文化を「伝統」として維持することで保障される既得権的恩恵、軍事文化によって得られる組織運営の効率性などによって、軍事文化は客観的に論議しにくかったのだろう。

スンスク・ムン(Moon, 2003; 2005)は、民族国家(nation-state)としての今の韓国社会と軍事主義の関係を論じた研究で、軍事主義が及ぼす甚大な影響力について説明している。圧縮的近代化を「達成」した韓国社会は、強圧、暴力、ヒエラルキー、集団的秩序などを唯一の価値体系として受け入れたが、その過程を順調にさせたものこそ、韓国社会最初の近代的組織だった軍隊だということだ。軍を経験した男性が企業などの組織を作り運営するなかで軍隊式秩序を唯一のやり方として体系化したのであり、その過程で組織は軍隊に行ってきた男性のみを必要とするようになる。このような文脈によって、軍隊と社会の男性中心的な組織のあり様はかなり似通っている。とりわけそれが女性に対してメンバーとしての資格を与えないという点で、同型である。

本研究で明らかにしたように、大学もまた女学生に科のメンバーとしての資格を付与しない。女学生の数が増加し、多くの男女共学大学の指導部が心配していることは「教勢¹⁸⁾が弱くなる」ことである。女学生は男子卒業生たちほど「積極的な社会活動をしなさい」と想像する人々にとって、女学生が真摯な学校の成員として、また同窓生として意味づけられることはない。また、男女共学大学の中で女学生たちが大多数の男性教授にとって「真摯な弟子」になり難いことも「常識」である。

朴露子(2000)は、企業が軍隊的人間を必要とする以上、軍は民主的に再編されないと主張する。しかし軍を除隊した多くの男性が大学に戻って学生として、教授として、職員として存在している。特に学生や教授となって戻ってきた男性は、女学生を同僚や弟子として認識しない。女性排除の側面で企業、軍隊、大学が緊密に関連しているのである。

スンスク・ムン(2003)と朴露子の議論を合わせてみると、軍隊は企業労働者たちを「柔順な身体」に訓練する所であり、50年にわたる〔朝鮮戦争の〕休戦状態において軍の役割は戦士を育てたというよりは、企業のための「柔順な身体」をもつ労働者を生産してきたと言ってもいいだろう。労働者の一部「エリート」は大学を経由するが、大学が企業労働者を生産するもう一つの関連機関だとするならば、大学における軍事文化は、ともすれば当然のものなのだ。このように、大学と軍隊は今日、輸出3000億ドルに達する巨大な経済規模をもつ民族国家を作

る動力になってきたのである。このように考えるなら、大学が軍隊や企業のように女性を排除するのも、驚くべきことではない。この緊密な三角構造の中で大学だけが企業や軍隊とは完全に異なる、性的に平等で民主的な組織となることは不可能だからだ。

2006年は女性教授クォータ〔任用目標〕制が施行されてから3年目になる年である。2004年、国公立大学に女性教授200人を割り当てて198人を任用し、そうしてようやく国公立大学の女性教授は11%になった。私立大学の女性教授の割合も20%を抜け出ない。このような状況で、音楽学部声楽科の教授の性別比率がほとんど1対1を成していることは、女性教授任用目標制の重要な背景である「女子大生たちのための役割モデル提供」という点で、かなりのエンパワーメントとなる。それにもかかわらず、声楽科では教授の性比のバランスを合わせようとする制度だけでは、性的平等が成り立たないことを示している。その組織が持つジェンダー・ポリティクスに関連する文化に対して、メンバー自ら省察的に分析し批判しなければ、いかなる制度も文言以上の役には立たないだろう。

しかし、先に明らかにしたように、大学構成員の半分以上が軍を経験し、大学と軍隊が企業の欲しがる軍隊式人間を提供するという構造の中で、大学が持つべき省察の能力が発揮されることはないだろう。男女共学大学で実践される軍事主義は、このような文脈で観察されねばならない。女性排除の面において企業・軍隊・大学が持っている類似性を考えるなら、この三つの空間を同時に思考することで韓国社会の軍事主義に対する論議を進展させる必要があるだろう。

注

- 1) 本稿は羅允慶「남녀공학대학교의 군사문화와 여학생 “시민권” 구성과정 : 음악대학 성악과를 중심으로」(『韓国女性学』韓国女性学会, 第23巻1号, 2007年3月)をもとに、日本語に訳出するにあたって著者が修正したものである。
- 2) 著者の羅(任)允慶(な(いむ)・ゆんぎょん/Yoonkyeong Nah)氏は韓国の延世(よんせ)大学教育学科卒業後、アメリカのUniversity of Wisconsin 州立大学の成人教育学科で女性教育を専攻し修士号と博士号を取得。現在は延世大学校大学院文化学科副教授である。最近の関心分野は男女共学大学校で女性学習者と女性の母性、多文化教育などであり、2008年4月から2009年3月まで立命館大学国際言語文化研究所に客員研究員として来日していた。
- 3) [訳注] 復学生とは、大学在学中に徴兵制度によって軍隊に行き、軍務を終えて大学に戻ってきた学生を指す。本稿で主題になるが、2年生になる前に行く学生が多く、大学の男子学生のうち約半分は軍に行って来た復学生である。
- 4) [訳注] 軍気とは軍隊の士気のことを指すことば。
- 5) 本稿で意味する軍事文化は、洪ドゥスン(1996)が定義する権威主義、画一主義、形式主義、保守主義、集合主義、完全無欠主義、公共組織主義と、権仁淑(2000;2005a)が定義する位階性、暴力性、攻撃性、性別性、性差別性などの軍事主義を包括するものである。本稿では特に権威主義、位階性、画一主義、集合主義、暴力性、攻撃性、性別性、性差別性などに焦点をあてて声楽科の軍事文化を分析していく。
- 6) インタビューでの最初の質問は「音楽学部声楽科の全体的な雰囲気や学生間の関係を説明してください」とした。その後の質問は、声楽科の人間関係やそれを可能にする機制とそれに対するインタビュー対象者の解釈などを聞いていった。
- 7) [訳注]「頭打ちこむ」とは、軍隊でよくやる体罰の一種。腕立て伏せの状態になり、腕ではなく頭で

体を支える、と想像するとよい。

- 8) [訳注] 軍必とは、「必ず軍隊を出ていること」の略。
- 9) [訳注] メンバーシップ・トレーニングの略。団結を高め、仲良くなるための合宿。大学入学時や夏休み・冬休み等にクラスやサークルで行くことが多い。
- 10) 全羅南道順天市照礼洞〔洞は日本の「町」に該当〕の聖カルロ病院が、新規任用した未婚女性看護師（看護助務士〔法定資格をもち看護と診療業務を補助する人〕を含む）に結婚と妊娠を禁止する誓約書を2年余りの間書かせていたことが明らかになり「人権侵害」と批判された（『京郷新聞』2006年11月6日付）。
- 11) [訳注] 腕章・肩章等の階級をあらわす記章の数（多いほど階級が高い）。
- 12) [訳注] 学番とは、大学の学籍番号のこと。入学する際に、学籍番号に入学年度がつけられることから。韓国では年齢などを聞く際に「何歳？」と聞くのが憚られたりするとき、学籍番号を聞く場合が多々ある。「何学番？」で「何年入学？」を意味する。主に先輩（年上）なのか、後輩（年下）なのかを知るため、それによって呼び名が変わったり（呼び捨て、○○先輩、○○兄／姉など）、接し方が変わる。
- 13) [訳注] 出身学校を基盤にした人脈のこと。
- 14) 軍隊における「世話」はキャロル・ギリガンなどフェミニストが概念化したケアの倫理学や包含的（inclusive）関係網の形成のための努力に基づくものではない。「面倒をみてやる」というかたちで男性の連帯が作り出しうる不正義（injustice）の基礎となるものである。「世話」を媒介に先輩の命令と後輩の無条件の服従が取引されるからである。フェミニズムでいう世話〔ケア〕と区別するために「世話」とカッコをつけて表記した。
- 15) 教育大学院で学生として出会った男性教師らの大部分は教師の暴力と関連するテーマについて「いつも殴られていた子供たちが卒業後に「師匠の日」〔1960年代半ばに制定され、公的休日ではないが学校長の裁量で休日とする学校が多い（毎年5月15日）〕になると決まって訪ねてくる」と語ることで、殴られた者と殴る者だけが真の子弟関係を結べるかのように言う。これらの言葉は、殴られることのない女学生は弟子ではないと言っているに他ならない。
- 16) 研究を進める中で、体育、演劇映画、美術の専攻者と本研究について話す機会があったのだが、彼ら・彼女らが語ってくれた各学科の雰囲気は、本研究のインタビュー内容と大きく違わないものだった。もちろん、これらの学科に対する研究が軍事文化を中心にして行われたことがないために、断言することはできないが。
- 17) 班とは、入学生などを学科（政治外交学科や仏文科などの専攻）が決まる前に学部（社会科学部や人文科学部）内で便宜上、1班、2班というようにいくつかのグループに分けること。学科が決まれば班はなくなる。
- 18) [訳注] 教勢とは通常、宗教の勢力拡大や伝播の勢いの強さを指す言葉であるが、ここでは学校の勢力を意味する語として使われている。

参考文献

- 権オブン（2000）「軍隊経験の意味化過程を通じて見た軍事主義ジェンダー・ポリティクス」梨花女子大学女性学科修士学位論文（未刊行）。
- 権仁淑（2000）「私たち生の中の軍事主義」『女性と平和』創刊号，133-161。
- 権仁淑（2005a）『大韓民国は軍隊だ』，ソウル：青年社．〔『韓国の軍事文化とジェンダー』山下英愛訳，明石書店〕
- 権仁淑（2005b）「ヘゲモニー的男性性と兵役の義務：KATUSAの男性性を中心に」『韓国女性学』，21（2），223-254。
- 金ウンジン（2002）「男女共学化した大学の「女性リーダー」に対する研究：新羅大学を例として」新羅

- 大学女性学科修士学位論文（未刊行）。
- 金賢美ほか（2006）「グローバルなコンテクストにおける女子大生リーダーシッププログラム開発のための提言」『韓国生涯教育学研究』, 12（3）, 1-28.
- 金ヒョソン（2003）「性暴力, ジェンダー・ポリティクスが男性間の政治に」『性暴力を書きなおす:客観性, 女性運動, 人権』, 鄭喜鎮編, ソウル:ハンウルアカデミー
- 羅允慶（2003）『女性教育と実践』, ソウル:ハギョンサ
- 羅允慶（2005a）「女学生たちの「声」を通じて現われた男女共学大学の男性中心性:女子大学と男女共学大学を経験した女学生たちの事例を中心に」『韓国女性学』, 21（2）, 181-221.
- 羅允慶（2005b）「軍事主義が再現され実践される空間としての男女共学大学:生涯教育学的介入の場」『韓国生涯教育学研究』, 11（4）, 1-32.
- 朴露子（2000）『我らが内なるファシズム』ソウル:サミン
- 朴露子（2001）『あなたたちの大韓民国1』ハンギョレ出版社.
- 辺ファスン（1995）「家父長的軍事文化が女性の生に及ぼす影響」『女性研究』, 8（9）, 71-92.
- 沈ヨンヒ（2005）「分断, 平和, 女性:女性非安保を超えて女性安保に」光復60年記念第7次総合学術大会, 韓国女性学会, 3-28, 10月14日, ソウル:延世大学校光復館.
- ユ・ヨンスク（2002）「女性将校の経験からみた韓国軍隊のジェンダー政治」延世大学校社会学科修士学位論文（未刊行）.
- 李ドンフン（2001）「軍隊文化の男性中心性と両性平等教育」延世大学校社会学科修士学位論文（未刊行）.
- 李ウナ（1999）「企業内男性ネットワークと女性排除に関する研究」梨花女子大学女性学科修士学位論文（未刊行）.
- 李チュヒ, チョン・ビョンユ, Lee, J.（2004）『ガラスの天井を割る』ソウル:ハンウルアカデミー.
- 鄭ユソン（2001）『別々と同士:男性支配文化からの脱却』, ソウル:本の世界.
- 鄭喜鎮（2005）「軍事主義と男性性:韓国「平和」運動の男性連帯批判のための時事評論」光復60年記念第7次総合学術大会, 韓国女性学会, 143-158, 10月14日.ソウル:延世大学校光復館.
- チョ・ジョンア（2001）「大卒女性の労働経験と職業意識神話」『労働とフェミニズム』チョ・スンギョン編, ソウル:梨花女子大学出版部.
- 洪ドゥスン（1996）『韓国軍隊の社会学』, ソウル:ナナム出版.
- 洪ソンヒ（1999）「航空会社女性乗務員の外見中心雇用に関する研究」誠信女子大学女性学科修士学位論文（未刊行）.
- Enloe, Cynthia（2000）. *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, University of California Press.
- Mohanty, Chandra（2004）. *Feminism without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*, Duke University.
- Moon, Seungsook（2003）. "Redrafting Democratization through Women's Representation and Participation in the Republic of Korea", Samuel S. Kim (ed.), *Korea's Democratization* (pp.107-134). Cambridge: Cambridge University Press.
- Moon, Seungsook（2005）. *Militarized Modernity and Gendered Citizenship in South Korea*. Durham and London: Duke University Press.